

## 学力検査問題 「国語」(その一)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

1 次の文章を読んで、問一～問八に答えよ。

※ サンテグジュペリの本を開けることも、フランスの大聖堂をたずねることもなくなって長い歳月が過ぎた今年の春、ある仕事のために『人間の土地』を読んで、ながい時間が過ぎたことにあるカンガイをおぼえた。だが、<sup>①</sup>古典はいつも磨かれたダイヤモンドのような多面性で私たちをおどろかせる。そのとき、あたらしく私の心を捉えたのは、自分がこれに<sup>②</sup>ポットウしていた四〇年代の終わりから五〇年代の半ば頃には、まだ一般にはそういう基準で考えられていなかった、したがって私自身もまったく気づかなかった、サンテグジュペリの地球的な視点だった。

たとえば『人間の土地』には、「飛行機とともに、われわれは **A** を知った」という文章がある。牛や羊に依存していた人たちによってつくられた、くねくねと曲った道をたどっていた時代の社会通念と、都市と都市を **A** でつなげることを知った空からの視点を人間が手に入れた時代のそれとは大きく変わるはずだということを、このみじかい文章は指し示しているが、これは宇宙飛行士の視点に通じるもの。他ならないだろう。空から地球を見るようになって、とサンテグジュペリは書いている。「わたしたちは、(…) 宇宙的尺度で人間を判断することになったのだ。人間の歴史を(もういちど) さかのぼって読むことになったのだ」

ロマン主義が私たちをながいこと「個人」の領域にのめりこませ、不必要に閉じ込めてきた。<sup>②</sup> あたらしい尺度の探求は、たぶん、人類ぜんたいの行く末を見定めながら行なわれるものになるだろう。それといっしょに、文学も建築も道路も、すこしずつ変わっていくはずだ。

「なにゆえ、憎みあうことがある？」彼はこんなふうにも書いている。「おなじ遊星によって運ばれるわたしたちは、連帯責任を担っているし、おなじ船の乗組員だ。新しい総合をはぐくむために諸文明が対立するのはよいことだが、たがいに喰い合いをするなどんでもないことだ」

※ アン・リンドバーグにせよ、サンテグジュペリにせよ、飛行機をつかって空から地球を「見てしまった」作家たちが、人間について、それまでになかった<sup>③</sup>総合的な視野をもつようになるのは、当然かもしれない。それでも、私は、こうしたサンテグジュペリの文章が一九三九年に発表されていたことを思い合わせると、愕然とせずにはいられない。ずいぶん、ながいことサンテグジュペリを読みながら、そして、ほとんどそれに負けないくらい長いこと、飛行機で旅をしながら、私は、空からの視点が人間の書くものを変えるだろうとは、考えてもみなかった。いったい、サンテグジュペリのなにを読んでいたのか、といわれるかもしれない。

自分が飛行機というものを旅の手段として考えるようになったのは、五〇年代のはじめだった。一度、飛行機で連れて行ってやるう、と父が妹と私を東京・大阪の旅客便に乗せてくれたとき、私たちは恐怖と緊張のあまり、はじめからおわりまでまっ蒼になっていて、とても空からの景色を愉しむどころではなかった。二度目は、どういうことだったか、<sup>④</sup>のつびきならない事情があって、私ひとりが大阪・東京の最終便に乗ることになった。父が心配して伊丹の飛行場まで送ってくれたのだが、乗ってみると、幼いころの同級生がステュワデスとして<sup>⑤</sup>トウジョウしていたので、こわさを忘れた。十五歳のとき、戦争で別れて以来、会っていなかった。

飛行機がまもなく羽田に着くというときに、彼女が私をコックピットにさそってくれた。なんとという機種だったのか、予想外に狭く思えた操縦室に足をふみ入れたとたん、暗い空の額縁のなかで、光にいろどられてまたたきつづける東京が眼下にひろがるのを見て、息をのんだ。だが、そのとき、聞きなれた<sup>※</sup>チャールズ・リンドバーグのフレーズ「翼よ、あれがパリの灯だ」を思い出しはしても、それを新しい視点からものを見ることがへの出発点と考えることも、そこにあたらしい人間についての思想を読みとることも、私にはできなかった。サンテグジュペリはこんなふうにも書いている。

「わたしの目は、アルゼンチンでの最初の夜間飛行の折、星々のように、草原のなかに散在する数すくない灯火がまたたいているだけの、暗い夜の模様が永遠に灼きついている。

そのひとつひとつは、闇の大洋のなかで、人間の意識の奇跡を告げ知らせていた。ある家では、読書をしたり、もの想いにふけったり、自己告白をつづけたりしていた。別の家では、おそらく、空間に探りを入れようと努力し、アンドロメダ星雲にかんする計算に懸命だった。あるところでは愛が営まれていた。ぼつんぼつんと、田園のなかに、それぞれの<sup>④</sup>糧を求める灯が輝いていた。詩人、教員、大工の灯のような、もつともつつましやかな灯までがあった。だが、それら生きている星々のなかには、なんと多くの閉ざされた窓が、なんと多くの光を消した窓があったことか。なんと多くの<sup>⑤</sup>眠りこけた人間がいたことか……。

たがいに結びつくように試みなければならぬ。田園のなかにぼつんぼつんと燃えているそれらの灯のいくつかと通じ合うよう努力しなければならぬ」

サンテグジュペリが、ドイツ軍に占領されたフランスの解放をねがって、北アフリカで軍事行動に参加中、一九四四年、<sup>⑤</sup>テイスツ飛行に出たまま行方不明になったという話が私の意識を刺しつづけた。自分は中学生だったとはいえ、戦争中にも考えることなく軍政権のいうなりになっていたことが口惜しく、<sup>⑥</sup>彼のような生き方への憧憬は年齢とともに私のなかでつよくなった。

(須賀 敦子、『遠い朝の本たち』より)

# 学力検査問題「国語」(その二)

(2023 一般Ⅲ)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

※サンテグジュペリ

フランスの飛行士・作家。サンテックスは愛称。

アン・リンドバーグ

アメリカの飛行家・文筆家。チャールズ・リンドバーグの妻。

チャールズ・リンドバーグ

アメリカの飛行家。初の大西洋単独無着陸飛行に成功。

問一 傍線部①～⑤のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

① カンガイ

② ボットウ

③ トウジョウ

④ 糧

⑤ テイサツ

問二 空欄

A

に入るにふさわしい漢字二字の語を記せ。

問三 傍線部(1) 「古典はいつも磨かれたダイヤモンドのような多面性で私たちをおどろかせる」は、「古典」がどのような特質を持つということを述べた表現か。三十五字以内で説明せよ。

問四 傍線部(2) 「あたらしい尺度の探求は、たぶん、人類ぜんたいの行く末を見定めながら行われるものになるだろう」とあるが、なぜか。その理由に当たる表現を、解答欄につながるように文中から抜き出せ。

問五 傍線部(3) 「総合的な視野」と同意の表現を、文中から抜き出せ。

問六 傍線部(4) 「のっぴきならない」の意味を、ア～オから選び、記号で記せ。

ア 決着のつかない

イ 言い逃れのできない

ウ どうにもならない

エ 予想もつかない

オ 身動きがとれない

問七 傍線部(5) 「眠りこけた人間」とは、どういう人間か。ア～オから選び、記号で記せ。

ア 現状に満足し、安穩と生きている人間。

イ 人間が相互につながるような行動をしない人間。

ウ 自分自身の考えを持つとしない人間。

エ 現実の問題からは、敢えて目を背けている人間。

オ 外の世界には興味関心を示さない人間。

問八 傍線部(6) 「彼のような生き方」とは、どのような「生き方」を指しているか。本文の内容を踏まえて、六十字以内で説明せよ。

## 学力検査問題「国語」(その三)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

2 次の文章を読んで、問一～問六に答えよ。

森有正氏は、その論文『変貌』のなかで、ヨーロッパ人の孤独の異常な激しさにふれて、それは「社会」が人間の基本的条件として在るからである、といい、ヨーロッパ社会においては、個人は自己一個の重みを支えているだけではない。自己一個であることにおいて社会全体の重みを受けるのである。逆に社会と個人との連帯の強さについても、異常なものがある。正しい意味で個人と社会とが対立的な事件として現われる場合には、社会の重みが先行することは当然の常識であり、それは社会そのものの通念に含まれている、とも指摘されている。

森氏のいわれるこの「社会」を、「都市」において考え、「個人」を「市民」としてみると、右の言葉の意味することはシンチヨウである。傾聴すべき発言であり、<sup>①</sup>西欧と日本との、「社会と人間」の在り方の根源的な相違を問われている。

日本のこの過程はどうであったか。「個人」は「家」に融けこんでいて、「社会」と対立する関係としては自立しなかった。都市は膨脹したが、それは膨大な個人の家のみこんだ空間としてであり、都市全体としての限られた枠のなかで、生死を共にする運命共同体として、自発的な公共精神も公共施設もあまり発達しなかった。

日本の家屋構造の本質をなしている「一家へだてなき構造」は、その塀と玄関によって外界(世間)とを峻別し、一家のなかは独立の個室にへだてることなく、障子と襖でかすかに仕切るといって考え方である。その原理が、鉄筋現代建築のマンションや公団アパートにまで貫徹している。外観はモダンな高層集団住宅で、ヨーロッパのそれと同じであっても、そこに住む人の生活の仕方は、原理的に全く違っている。いまだは夫婦と子供だけという「近代家族」であっても、依然として妻は夫を「うちの人」といい、夫は妻を「家内」といい、家族は一人一人の個人としてではなく、「うちの者」と一括される。家の内部は全くの「へだてない間柄」で、社会は世間とよばれ、門を一步出たら「他人は敵と思え」などと、年寄りにいわれる。こういう生活の場から、<sup>②</sup>西欧型の公共社会の観念が発展していくのは当然であろう。

**B**、わが国の伝統的な観念が、明治以来、年を追って弱まり、変化していることを忘れてしまったわけではない。

江戸時代に完成した家父長権絶対の封建的家族制度は、近代天皇制国家の必死のテコ入れにもかかわらず、根元から揺らぎだし、実体なき家父長制として擬制化の一途をたどってきた。明治後期から「家父長制」の危機が異常に叫ばれ、個我にめざめた知識青年の苦悩のもとになったことは、記憶に新しい。それが敗戦後の民主革命によって、旧民法もろとも否定された。農村の大家族制もハウカイした。そして、今日われわれが見るような市民家族制と、個室をもつ「家」が生まれつつある。その上に、「家」と「職場」を単位とする地域民主主義が育ち、都市の公共性への市民の関心を急速に高めている。

<sup>③</sup>だが、四十年前には、和辻哲郎はこの問題にふれてこう述べている。「日本人は外形的にはヨーロッパの生活を学んだかも知れない。しかし家に規定せられて、個人主義的、社交的なる公共生活を営み得ない点に於ては、ほとんど全くヨーロッパ化していないと云ってよいのである」と。

そして、「日本の人間が、その全体性を自覚する道も、じつは家の全体性を通じてなされた」として、日本の家の、氏神(祖先神)から先祖につらなるタテの全体性の把握の特徴をあげている。これは、西欧と違うばかりでなく、**C**、「部族」の団結に基本をおいた乾燥地帯の遊牧民の存在の仕方とも全く違って、家族的な生活の共同にもっとも強く重心をおく、モンソン地域の人間存在の仕方の特徴だという。この点、日本と中国の「家」がテンケイであった、と。

「明治百年」をむかえた私たちに、この言葉は示唆にとんでいいる。いまでは第一地域とよばれ、西欧との類似を強調される日本であるが、二つの封建制、二つの近代の間には、このように深い相違があったのである。

日本人には、「家」と「国」(近世においてこの観念は「藩」を意味していた)のあいだに、都市を拠点とする「社会」という経験の媒介環をもたなかったから、統一国家の成立をむかえても、その全体性(国家)を理解するのに適当な経験上の手がかりが得られず、結局、一系家族のアナロジを拡大した思考様式に依存しなくてはならない、という弱点をもった。**D**、この弱点は、為政者によっては、かえって利点として活用された。

木戸孝允や大久保利通は、明治新国家の思想的な拠り所や支持基盤をどこに求めるか、皇室になじみの薄い一般人民に、いかにしたら天皇制国家への忠誠を誓わせられるか、にフシンしていたと思うが、結局は、かれらもまた「家」のアナロジを用いる方向にむかったようである。つまり、日本国民は皇室を宗家とする大家族である。国民の全体性は、同一の祖先より生じたこの大いなる「家」の全体性に他ならない、とこうしたイデオロギー政策は成功した。日本人の存在様式に根ざしていたこの虚偽意識は、明治どころか、昭和のファシズム指導者によってさえ利用されたのである。

ひるがえって考えれば、われわれがモンソンの民族だといっても、大陸のそれとくらべるとき、大きな違いがあらわれていた。<sup>④</sup>日本と西欧との違いは、その「モンソン地域」と「牧場地域」の違いであつたばかりでなく(和辻『風土』論の核心はここにあつた)、島国と大陸との生存形態の相違も重なりあつている。都市に城壁がなく、「家」が基本単位をなすような共同体が、長い間にわたって微温的な支配をつづけた

## 学力検査問題「国語」(その四)

(2023 一般 III)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

ような存在様式、そこからは西欧型市民社会にみられるような痛烈な孤独感を秘めた強い「個人意識」の発生はありえなかった。また、他方、乾燥地帯の遊牧民族のように、「部族」を単位とし、生命とするような鞏固な集団(きやうこ)の結合も生まれなかった。

モンsoon・アジアは、その独自の風土と生産様式にもとづいた温和な家族的共同体を構成した。そして、そこからラディカルな対抗者としてではない、幾多の「個」をも生みだす余地をもっていた。その意味では、われわれは「牧場の人間」(西欧型人間)と「沙漠的人間」の両極端のあいだに位置しているといえないこともない。中国における偉大な「個」の例はおくとしても、日本の歴史には、次のような世界級の「個人」がうみだされ、星のように輝いている。

紫式部、吉田兼好、親鸞(しんらん)、日蓮(にちれん)、道元、世阿弥(ぜあみ)、雪舟、千利休、本居宣長(もとのおりのなが)、山県大弼(やまがただいに)、高野長英、吉田松陰、福沢諭吉、中江兆民、岡倉天心、内村鑑三、夏目漱石、西田幾多郎、柳田国男など、いずれも西欧的な「個」ではないが、それだけに個我の日本的な展開様式を示していて、そこに独自の出口のあることを教えている。

私はヨーロッパを一巡して、「明治百年」へのひとつの民族的視点を確認すると共に、そこに依拠して、かえって人類文明に寄与しうる日本のユニークな新しい道のあることを発見した。

(色川 大吉、『現代評論集』「さまざまな明治百年」より)

※問題作成のため、本文の漢字に読みがなを付けた個所がある。

※第一地域 ユーラシア大陸の東西の両端、すなわち日本と西欧で封建体制を経験した高度な資本主義の文明国のこと。

アナロジー 類似性。

問一 傍線部①～⑤について、カタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

- ① シンチョウ ② ホウカイ ③ テンケイ ④ 示唆 ⑤ フシン

問二 傍線部(1) 「西欧と日本との、『社会と人間』の在り方の根源的な相違」とあるが、西欧の考え方として適当なものを、ア～エから選び、記号で記せ。

- ア 社会は個人の自由精神を尊重し、全体の調和よりも個性を重視する。  
イ 社会を構成する個人はいかなる場合でも社会と同じ程度に尊重される。  
ウ 個人の社会的権利は通念として社会全体の公益に優先して尊重される。  
エ 個人は社会を支持するとともに、相反するときは公共が優先される。

問三 空欄 A 〽 D に入るべき接続語として適当なものを、ア～カからそれぞれ選び、記号で記せ。

- ア また イ そして ウ あるいは エ しかし オ もちろん カ しかも

問四 傍線部(2) 「西欧型の公共社会の観念が発展しにくい」とあるが、この原因は何にあるか。文中から十字以内で書き抜け。

問五 傍線部(3) 「家に規定せられて、個人主義的、社交的なる公共生活を営み得ない」とあるが、このように考える理由を、五十字以内で説明せよ。

問六 傍線部(4) 「日本と西欧との違いは、その『モンsoon地域』と『牧場地域』の違いであったばかりでなく(和辻『風土』論の核心はここにあった)、島国と大陸との生存形態の相違も重なりあっている」について、日本の特徴的な生存形態を端的に表す語句を、文中から十字以内で書き抜け。

## 学力検査問題「国語」(その五)

(2023 一般 III)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

3

次の文章を読んで、問一～問四に答えよ。

平安時代のキョウウテイを舞台とする恋愛物語を読んでいたら、心のやりとりというのは全部歌をとどける、そのお返しをする、気に染まなかつたら歌なしで何も記さず、山吹の薄葉に、カワラナデシコの花一輪だけ、使いにもたせてやる。そんなやりとりの繰り返しですがそのまま物語になつてゆきます。そういう心のやりとりをする習慣が、その時代の文化でした。そういう習慣をささえたものは何だったかと言え、歌を詠み、歌を送る、返すという確かなリテラシー、読み書き能力です。

文化が習慣になるのに決定的な力となってきたものが、リテラシー、読み書き能力の確かさでした。心のやりとりの道具が、郵便、手書きの手紙、ワープロの手紙、電話、携帯電話、FAX、パソコンのメール、携帯メール、多々さまざまになったままの、いまはどうでしょうか。そうした道具、機器は、時代のリテラシー、読み書き能力をどれだけ確かにするものとなっているかというのを考えるのです。

いま、実に多様なコミュニケーションの道具、ツールをわたしたちにもたらしてきたもの、もたらしているものは、技術であり、たゆみない技術の革新から、たゆみない道具の変化がもたらされ、それがたゆみなく新しい状況を次から次にもたらしているのにもかわらず、それらをかためてすばやい技術の展開によってひろくもたらされてきたのは、習熟のケツジョです。技術を習熟するということがなくなった、あるいは習熟することが必要とされなくなった。

経験知というもの、経験して知るということが大切なことでなくなった。できるかできないかは、それは道具の能力の問題であつて、もうそれぞれの人々の能力の問題ではなくなっています。そうやってよければ、人の能力を問う必要がなくなった。そういうふうになつてきています。技術というものは<sup>①</sup>そういうものであり、そのことによつてわたしたちがどれほど多くの便益を得てきたかは言うまでもないことなのですが、一つだけどうしてもまずいことがこのつたままになった。それはリテラシー、読み書き能力の無表情化、無個性化、平均化、そしてその結果としての無力化です。

携帯電話やFAXやパソコンのメールや携帯メールが、言い回しやヴォキャブラリーをゆたかにするのでなく、逆に、ニュアンスや表情をどれほど貧しくしてきたか、ということを考えます。笑うは爆笑で、破顔 **A** も呵呵大笑もない。わかつたは了解で、合点も承知もない。頃合や時分を計るといふこともなく、なにより間や間合をとることが、人と人のあいだに、いつかなくなりました。メールなどで、すぐにあからさまな表情をもつ絵文字にたよるようになったのも、いまわたしたちのもつ言葉がそれだけ表情をなくした言葉になっている、その渴きのせいなのもかもしれません。

技術革新というものの命題は、時間を短縮するということです。ところが、リテラシー、読み書き能力というものは習得によつて、習熟によつて、ながく時間をかけてしか得られない、そういうきわめて日常的な性質をもっています。日々の習慣となつてはじめて得られる、そういうリテラシー、読み書き能力によつて人が手に入れるのは経験と判断です。その経験と判断は、失敗や後悔のような苦い経験や間違いからみちびかれることも少なくありません。

そういうリテラシー、読み書き能力のありようについて、わたしは「ことばのダシのとりかた」という詩を書いたことがあります(詩集『食卓イチゴイチエ』晶文社)。

かつおぶしじゃない。

まず言葉をえらぶ。

太くてよく乾いた言葉をえらぶ。

はじめに言葉の表面の

カビをたわしでさつぱりと落とす。

血合いの黒い部分から、

言葉を正しく削つてゆく。

言葉が透きとおつてくるまで削る。

つぎに意味をえらぶ。

厚みのある意味をえらぶ。

鍋に水を入れて強火にかけて、

意味をゆつくりと沈める。

意味を浮きあがらせないようにして

沸騰寸前サツと掬いとる。

それから削つた言葉を入れる。

## 学力検査問題 「国語」(その六)

(2023 一般 III)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

言葉が鍋のなかで踊りだし、

言葉のアクがぶくぶく浮いてきたら  
掬ってすくって捨てる。

鍋が言葉もろともワツと沸きあがってきたら

火を止めて、あとは

黙って言葉を漉しとるのだ。

言葉の澄んだ奥行きだけがのこるだろう。

それが言葉の一番ダシだ。

言葉の本当の味だ。

だが、まちがえてはいけない。

他人の言葉はダシにはつかえない。

いつでも自分の言葉をつかわねばならない。

そうした「言葉のダシのよく効いた」日々のリテラシー、読み書き能力が、わたしは、人それぞれにとっての文化というものだろうと考えています。効率と便益を生みだすものが技術だとすれば、文化というのはずっと非効率で、そうすることがいいと思うからそうするといったくらの便益しかもたらさない。けれども、人の生き方の姿勢をつくるものはそうした日々の習慣としての文化だろうと思っています。習慣をつくりだすのが文化です。

次から次へ新しい便益の高いものが世に出て、すぐまた消えてゆきます。そうした新しい便益の高いものに次々に手をだしながら、しかし、ふりかえって、その賑やかさのなかに、何かが決定的に欠けているという感覚がのこる、ということをもうずっと繰り返しているような感じがします。けれども、どこか「言葉の本当の味」が感じられないというような日々がまだまだつづくような気がします。

(2010年11月5日)

(長田弘、『なつかしい時間』より)

※問題作成のため、本文の漢字に読みがなを付けた個所がある。

問一 傍線部①～④について、カタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

- ① キュウテイ      ② ケツジョ      ③ イチゴイチエ      ④ 賑

問二 空欄 A に漢字二文字で適語を入れよ。

問三 傍線部(1) 「そういうもの」とはどういうものか。二十五字以内で説明せよ。

問四 傍線部(2) 「『言葉の本当の味』が感じられない」のは、なぜか。五十字以内で説明せよ。



解答用紙「国語」

2023

般 III

準  
中  
級

1

問一	①	直線	感概	②	没頭	③	搭乗	④	かて	⑤	偵察
問二											
問三		を も た え ず 新 し い 解 釈 を 生 み 、 新 た な 価 値 の 発 見									
問四		おなじ遊星によって運ばれるわたしたちは、連帯責任を担っているし、 おなじ船の乗組員だ									
問五		地球的な視点									
問六		ウ									
問七		イ									
問八		結 び つ く よ う に 努 め る 生 き 方 。 、 人 と 人 と が	同 じ 地 球 に 住 む 人 間 同 士 と い う 意 識 を 持 っ て								

2

問一	①	深長	崩壊	③	典型	④	しき	⑤	腐心
問二		エ							
問三		イ							
問四		一 家 へ だ て な き 構 造							
問五		共 性 を 経 験 で き る よ う な 空 間 を も つ こ と が な							
問六		温 和 な 家 族 的 共 同 体							

3

問一	①	宮廷	②	欠如	③	一期一会	④	にぎ
問二		一 笑						
問三		習 熟 し な く て も 誰 で も 簡 単 に 使 い こ な せ る も						
問四		次 々 に 生 み 出 さ れ る コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン ツ ー						
問五		の 。						
問六		し ル が 、 人 々 の 読 み 書 き 能 力 の 無 力 化 を も た ら						